



小学部 全校授業研究会実施

小学部6年生活単元学習で全校授業研究会が行われました。対面参加者とオンデマンド配信参加者を合わせて35名の参加がありました。今回は全校授業研究会の様子についてお伝えします。

小学部生活単元学習

<未来へのスケッチ×授業づくりのつながり>

「未来へのスケッチ」の作成に当たって児童に聞き取ったところ、「友達と仲よく」「いろいろなことにチャレンジしたい」「発表を頑張りたい」などの思いや願いをもっていることが分かった。学級目標を“チームアップ 力を合わせてがんばる”とし、合い言葉にしている。修学旅行の思い出の一つ“わんこそば”を5年生に紹介する会「にこにこわくわくわんこそば」は、自分たちが店員役になり、毛糸の蕎麦を手作りのお椀で給仕する。わんこそば体験会の成功のために、児童が学級の一員として自分にできることを考え役割を果たしたり、友達と協力できることに気付いて活動したりするなどの課題の解決に繋がりたいと考え、授業を計画した。



<授業者のしかけ>

ゲストティーチャーをお客さん役に

～繰り返しの活動の中に変化をつけ、児童がわくわくする授業を目指して～



<生徒の様子>

・繰り返しの活動によって見通しをもち自分から進んで取り組む姿が多く見られた。お客さん役のゲストティーチャーが毎時間変わることで、「次はだれかな?」と期待感をもち、意欲的に授業に臨んでいた。また、ゲストティーチャーに楽しんでもらうため学級の仲間とチームアップできることを考える動機に繋がったり、授業の振り返りの際、ゲストティーチャーのアドバイスに耳を傾けたりした。



<授業者のしかけ>

児童同士の自発的なやり取りを引き出すための教材や場面の設定

～友達に働き掛けたり、友達からの働き掛けに応えたりする姿を目指して～



<生徒の様子>

・エプロンのひも合わせや、のれん付けなど必然的に友達と協力する教材を用いたことで、「〇〇さん、お願いします」と友達に依頼したり、協力的な態度で応えたりする様子が見られた。わんこそばの準備や給仕の際の役割を固定した部分と役割を決めない部分をつくったことで、友達の様子をうかがって行動したり、声を掛け合ったりする児童同士の自然なやり取りが見られた。



<授業者のしかけ>

ICT機器やアプリケーションの活用

～授業の学びを実感したり、達成感を味わったりできる振り返りを目指して～



<生徒の様子>

・授業の写真や動画を見返すことで、発言が難しい児童は授業のポイントに沿って発表したり、状況の把握が難しい児童は活動時の自分や友達の様子が客観的に分かり、達成感を味わったりできた。



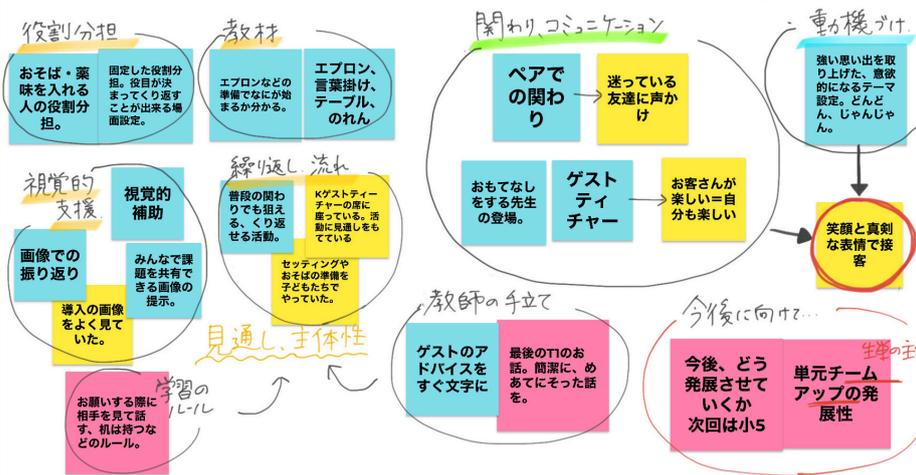
<にこにこわんこそばオープンの様子>

5年生を招待して、わんこそばやさんをオープンしました。今までの開店準備の練習の成果を発揮し、「はい、どんどん」と掛け声を掛けたり、「どうぞ」とお客様の5年生に関わったりして楽しくわんこそばやさんをオープンしました。お客さんとして来店した5年生も楽しかった!と話す児童がいて、大成功のオープンとなりました。



研究会の協議から

子どもたち同士が関わりを広げながら主体的に学びに向かう支援の工夫について



【協議で話題になった主な内容】

- ・ 修学旅行の楽しかった思い出がベースにあり、自分の役割が分かっていた。
- ・ 合図や音などを効果的に使い、動き出すきっかけ作りになっていた。
- ・ 映像による振り返りが効果的だった。
- ・ 導入や板書を適切な量で示すことが必要ではないか。
- ・ 振り返りで関わりを思い出させる映像、言葉掛け、板書が適切だった。

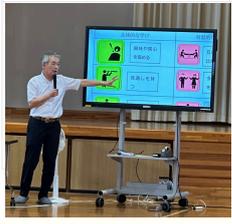
【今後に向けて】

- ・ 導入を簡潔にし、子どもたちが動けるような設定があればよい。
- ・ ハプニングやうまくできない経験から協力して解決するような場面があるとよい。
- ・ 児童の実態に合わせ、もう少し難易度の高い役割があってもよい。

講評 秋田大学教育文化学部 名誉教授 武田 篤先生

- ・ 今、求められている授業とは一人一人の子どもが1時間で何を学び、何を考え、どんな思いだったのか子どもの様子から見取ることである。また、子どもの学びをどうしたら主体的で対話的で深い学びにつながるのか考えて授業を進めることが大切である。教師が答えを教えるのではなく、失敗や試行錯誤をする経験や体験から子どもたち同士で解決していくことが重要である。
- ・ 今回の授業は、修学旅行の楽しいイメージが共有できており、5年生に教えてあげたい、ごちそうしたいという動機付けがあり、子どもたちにとってはイメージがしやすいものだった。体験していないことは学習を進めていくことが難しいことが多いため、体験や経験を大切にしたい。
- ・ 重度の子どもをどうするか、学びを保証するか、どうしたらいいのか答えはない。今回の授業では、クラスと同じ空間で学ぶことは豊かな体験であり、「あーあーあー」と声を出して表現をしていた。世界を広げていくために、教師が子どもの思いや気持ちを代弁し、言葉で周りの子どもたちに返して世界を広げていくことが大切である。
- ・ 子どもたち同士の主体的な学びを構築するためには、授業のスタイルを変えていく必要がある。ティーチング（教師が教える）ではなく、教師が子どもの言葉をつなぎ、広げていくことが大切である。主体的な学びを作っていくためには、秋田の探求型授業（導入、めあての提示、自力思考、考え学び合う、振り返り）などメインの活動である学び合いが大切にしてアクティブラーニングを実践してほしい。
- ・ ピクトグラムのアイコンを指導案に入れることで、教師が主体的で対話的で深い学びを意識し、子どもたち同士の学びのために教師はどうしたらいいか考えることにつながると思う。文章だけではどのような仕掛けがあるのか読み取りづらいため、アイコンがあるとイメージがしやすいため、検討してほしい。

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
興味や関心を高める	互いの考えを比較する	思考して問い続ける
見通しを持つ	多様な情報を収集する	知識・技能を習得する
自分と結び付ける	思考を表現に置き換える	知識・技能を活用する
粘り強く取り組む	多様な手段で説明する	自分の思いや考えと結び付ける
振り返って次へつなげる	先哲の考え方を手掛かりとする	知識や技能を概念化する
	共に考えを創り上げる	自分の考えを形成する
	協働して課題解決する	新たなものを創り上げる



【資料】独立行政法人教職員支援機構より